

ドキュメンタリー映画批評は影より出ずる

クリス・フジワラ（映画批評家）

「現実とその影」と題された1948年の小論で、エマニュエル・レヴィナスは芸術作品とそれを観る者との関係を驚くべき豊かさと明晰さでもって描き出している。レヴィナスが書いているのは芸術一般についてだが、そのすばらしくも厄介極まりない論考は、とりわけ映画へと適用するのにふさわしい論点を含んでいる。

レヴィナスによれば、芸術はそれを観る主体を現実世界の外へ連れ出し、受動的で負うべき責務のない「無名性」の状態へと追いやるものである。この「無名性」において観る者は、異邦的な非現実の世界を享受する。芸術作品は、それを観る者と現実との関係を宙吊りにするのみならず、そこに描かれる人々の姿を二重化し、自身とその似姿を同時に示しもする。芸術はその本性上ある隔たりを露わにするのであり、それによってあらゆる人間はその内奥において自己と戯画とに分かたれるのである。

ここでのレヴィナスの議論は、フィクション映画やその他の形態の芸術作品と同じく、ドキュメンタリー映画にも適用可能である。ドキュメンタリー映画は、様式において芸術的な要素を欠いていても、芸術の光の下にある人々を露わにする。この人々が生きる影の生は現実の生ではないが、なおも単なるイメージ以上のものだ。というのも、写真映像と現実の人間との間にある結びつきは、象徴のような〔恣意的な〕ものではなく、必然的なものだからである。半ば現実、半ば非現実のこの世界の中においては、実際に生きている人々が影のような姿となり、現実世界で会う人々には付与されている、他者性という特権を失うことになる。さらに言えば、多くのドキュメンタリーがそれを観る者たちを責任ある主体や市民として遇しているとしても、ドキュメンタリーを観る者がとる最も基本的な態度とは、

あらゆる映画に対してもそうであるように、倦怠しつつ受動的に自らと切り離されたものを鑑賞するというものなのである。

「現実とその影」におけるレヴィナスの議論は、その末尾に及んで、あるいは意外にも思えるような転回を見せる。芸術が私たちを世界から切り離すとして、その一方でレヴィナスにとっての批評とは、私たちに世界を、世界には私たちを取り戻させるものだというのである。芸術作品が私たちを前に睥睨しつつ不変の形をなして黙しているならば、批評はこれに（レヴィナスが「語の超越」で用いた表現を借りるなら）「私たちを夢から抜け出させる言語」で語らせることができる。芸術作品に全てが備わっているというのなら、批評は、その対象とするあらゆる作品が断片化し、自己矛盾をきたす条件を暴きたてるのである。

ドキュメンタリー映画作家の負うべき責任については、多くのことが書かれてきた。対して、ドキュメンタリー映画を扱う批評家の責任について書かれたものはほんのわずかなように思われる。両者は本来、相補的なものであるはずだ。批評家は、作品を未一完成なものとし、作品への賛否を論じつつ、作品が求める観る者との対話への可能性を探求しなければならない。批評家はまた、映画において行為者となる三者——観る者、作り手、画面の中で描かれる人物——の役割を分析し、この三者がみなそれぞれに主体性を授けられているということを認知する義務を負っている。この主体性はいまや、映画制作とその観客を取り巻く状況によって薄められ、あるいは無化されるまでに脅かされている。批評家はその義務を果たすことで、カメラとスクリーンの介在によって分断されたこの三者は、共通の現実を取り戻すことができるのである。（中村真人訳）

■ヤマガタ映画批評ワークショップ

映画祭というライブな環境に身を置きながら、ドキュメンタリー映画を通して、世界について思考し、執筆し、読むことを奨励するプロジェクト。参加者は、プロの映画批評家のアドバイスを受けながら文章を執筆し、それを一般に発表。

10/11-10/14 | 講師：クリス・フジワラ、北小路隆志